

中国語の実験的語学教育メソッド

—カルタの効用—

三 瀧 正 道

—はじめに—

近年、センター入試に中国語が導入されることになり、そのための指導要領の作製がきっかけとなって、中国語教育メソッドの研究の必要性が叫ばれるようになった。

中国語文法の研究は英語などに比べ遙かに歴史が浅く、20世紀になって漸く近代的な“中国語語法”の研究がスタートした。しかも、全く異質な言語である英語の文法体系を基準にして組み立てが試みられたため、俗に言う“ベッドにあわせて足を切る”混乱が生じ、完成された文法体系が確立されたと言うにはほど遠い状態が続いた。

このような状況は、はや21世紀を迎えようという今日でもなお根強く残っており、毎年続々と出版される教科書類の中には、自己流もしくは大方の合意事項を無視した恣意的な記述でいたずらに学習者を混乱に陥れているものも散見される。

文法体系が未完成であることは、当然の帰結として、「いかに教えるか」より“何を教えるか”が先だから、教育メソッドの研究の前に文法研究をし

っかりやることが肝要だ」という風潮を生んだ。

それも確かにスジ論ではあるが、ではその成果として、様々な研究を総括して、統一的な文法体系の構築が積極的に図られ、実際の中国語教育に繋げていく努力が為されてきたかという点、現実には、言いつ放し、やりつ放しで、教室にはほとんど還元されない状態が長年続いていた。学会でもメソッド部門の研究はほとんど研究として認められないかあるいは軽視されるありさまだったので、仮に優れたメソッドを開発した人がいても、その人一代限りの職人芸として終わってしまうのが通例だった。

このような状態のところ降って沸いたのが学習指導要領の話だった。気がついてみれば、その間、英語の教育メソッドは長足の進歩を遂げていた。中国語教育界の怠慢は覆うべくもなく、わたし個人から見ても、英語に比べ50年は遅れていると思う。

最近、中国語教育研究会ができたり、学会で教育部門の発表が奨励されるようになったのはこういった経緯によるもので、それ自体は大いに歓迎される

べきことであろう。ただ、問題も無くはない。それは、1年生に教える初級レベルの文法でさえ事実認識に様々な問題がある中国語にとって、むしろ、初歩の文法をどう教えるかが最大の難問であり、その点をテキストの中でどうこなしているか、は場合によっては立派な研究成果になる、ということがなかなか理解されない点である。

例えば、英語の教員から見れば、そんなレベルのことは中学校の先生がやっていることになり、したがって「その種のテキストは大学の教員の業績の対象になる資格はない」と公言する人もでてくる。この種のプレッシャーが中国語教育メソッドの開発研究を阻害している一面も無視できない。

もちろん一方で、先に述べたような安易なテキストが横行していることが、このような研究を積極的に評価しようと言う動きに対し不利に働いていることは、中国語教育界が素直に認め自戒すべきところだろう。

一中国語初級教育の問題一

以上のような背景から考えると、中国語教育でまず為すべき事は、大いに経験を公開し交流することなのだろう。今更、ではなく、今こそ、なのである。

実際のところ、これまでの中国語教育は、多くの中国語を使える人材を育てた、というより、多くの中国語嫌いを育ててきた、といった方がはるかに正確だ、といわざるを得ない。

その原因としては、1クラスの人数が多すぎる、1年で教える内容(発音、文法)が多すぎる、という当然の理由のほかに、教える教員側の問題、即ち、教員の質のばらつきと教員の教える工夫の欠如も指摘されなければならないだろう。

どうしたら学生が興味を持続し、積極的に中国語学習に取り組めるだろうか。私はその鍵の1つは、短い会話表現の徹底学習を進める事だと思う。この事は決して、どの言語でもそうだし、ということにはならない。中国語の持つ特殊性を理解して初めてうなずけることなのである。

中国語は日本語に比べ遥かに音節が多く、しかも声調という日本人に得手とはいえない要素が大きな役割を果たす。更に膨大な数の漢字があり、それぞれの発音を覚えたとしても、それはまだ多くが単語のレベルには達していない。加えて同音異字はいくらでもある。

話す、聞き分ける、が初級レベルの学習者にとっては大変な苦勞となる言語なのである。

週2コマの外国語科目の選択者に授業以外で多大な時間を中国語だけに割くことは要求できない。授業内でこれをこなすことを要求し、なおかつ楽しく、興味を持続できるように、ということであれば、当然工夫が必要になる。

短い会話表現の修得には幾つかの利点がある。短い会話でも通じればうれしい。だから興味の持続に役立つ。こ

これは正論であり、もちろん、大きな目的の一つだが、これだけならどの言語にも言えることであって、何も中国語に限った話ではない。

中国語学習者にとって重要な点は、まず、“短い”ということだ。最初は1つの字を正確に発音することだけでも大変な中国語では、“長さ”イコール“字数”は大きな問題だ。私の経験では、最初はまず3文字が限度と言えよう。したがって3文字表現を徹底して覚えてもらう。

よく市販の中国語会話の本で、最初から10文字以上の会話を載せている本がよくあるが、初級レベルを修了し、一応の文法も理解できる人ならともかく、初級学習者向けならナンセンスと言わざるを得ない。

10個もの発音を続けて言うことが至難の業である上に、文法理解が伴わないから応用もできず、大体は最初の数ページに手垢がついただけで本棚に鎮座する運命になるだろう。

中国語の10文字は日本語に比べ遥かに情報量が多い。それだけ使用できる場面が細かく限定されてしまい、たとえ百歩譲って暗記できても、応用ができなければ実用度は短い表現に比べ却って低くなってしまうのである。

短い使える表現をたくさん正確に覚えることが、発音訓練、発話訓練、そして聞き分ける力の養成に極めて役に立つ。しかも実用に即つなげるので覚え甲斐もあり、興味も持続できる。

そこで次に問題になるのが、どうや

って覚えてもらうか、の工夫と言うことになる。覚えれば実用になると言っても、その覚えるまでが苦痛であれば、その段階で多くの学生が脱落してしまう。3文字なら短くて覚え易くても、それで覚えるのが楽しくはならないし、厳密な発音を要求されれば、やはりしんどいことに変わりはない。

一カルタの効用一

私がカルタを使った授業を最初にやったのは、今から10年以上も前に明治学院大学でやったのが最初である。たまたま戸塚に新校舎ができ、防音のきいた教室だったので、これなら学生が多少エキサイトしても周りから文句は出まい、と実験してみることにした。

その時は短い会話表現をやったわけではない。それまで常々疑問に思っていたことを解決する方法として試みたのである。

既に述べたように、初心者にとっては短い単語を覚えるのさえ大変な中国語で、まず課文があり、たくさんの新出単語を含んだ文を読まされても、すぐそれを使って会話練習をし、応用会話にチャレンジするのは大変な苦痛である。いくら課文の後ろに新出単語の説明が載っていても、それを見たからと行って、瞬く間に頭に入るものでもない。

中国語のような言語では、まず先に徹底して新出単語に口慣れし馴染まないと、応用会話練習など絵に描いた餅に等しい。

そこで私が試みたのは、まず最初の5課分の新出単語をカルタにすることだった。全部で70個弱だったと記憶している。1枚のカードの表に中国語の単語とその発音表記を書く。裏には日本語訳を書く。学生4人につき1組を目安に必要な分のセットを学生に作ってもらった。

当時、1クラスが40名くらいだったので約10グループができた。それぞれ机を囲んでカードをとる。最初は私が中国語を言って中国語を取る。次に裏返して日本語を表にし、私が中国語を言って日本語を取る。最後はまた中国語を表にし、私が日本語を言って中国語を取る。

1回の授業でこの3回をやると、70枚のカードでほぼ15分かかる。その間、学生の熱の入り方は尋常ではなく、喚声と気迫に圧倒されそうになる。授業の導入効果としても申し分ない。また、各グループには順序をつけてあり、一回取った度に各グループのトップとビリが入れ替わるので、学生もますます熱が入るのである。

この方法で単語に慣れてから各課の本文をやり、応用会話を試みたところ、これまでとは比べものにならないくらい授業がスムーズに進み、学生の中国語に対する興味が持続するようになった。

これに味をしめて、次にこの方法を私の住んでいる柏市の市民講座のおばさんたちに応用してみた。

市民講座のおばさんたちの目的は単

純明快、文法は苦手、とにかく中国に旅行に行った時、簡単な会話ができる様にして欲しい、と言うのが最大公約数的要求と言えよう。

そこで、ここでは短い常用会話表現をカルタでやることにした。明治学院の経験から、1回にカード70枚とし、上述の3通りの取り方を毎回の授業で行った。そして、毎授業、みんながもう覚えたと言うカードを5枚くらいずつ入れ替えて新しい表現を補充していった。

その結果、隔週の市民講座で2年間でほぼ全員が350くらいの日常会話表現をマスターし、それを足がかりに簡単な応用会話や聞き取りもこなせるようになった。毎年恒例の中国旅行でも、今では全く私の助けなしに買い物や食事をしたり、タクシーに載って市内を回ってきたりできるようになった。

中には興味が更にエスカレートして、文法にも積極的に取り組み、民話を翻訳したり、時事中国語を勉強して、中国語専攻の4年生顔負けの読解力を身につけた人も4~5人を数えるようになった。

一方、立教で長年中国語を教えている私にとって、カルタはやはり立教でも試してみたい方法で、部分的に試みたこともあったのだが、人数や教室の防音の関係で積極的には実施できなかった。

しかし昨今のカリキュラム改革で1クラスの学生数が小人数になったのをきっかけに、今年から授業の一貫とし

てははっきり位置づけ実施しようと思いき、立ち、教室も教務にご無理をお願いして案配していただいた。

たまたま教科書も統一テキストになり、暗誦が奨励されたので、まさに潮時であったともいえよう。

各課の文から役にたちそうな常用表現を平均5～7個選び、学生にカルタにしてもらい、明治学院の時と同じような形式で試みた。幸い週2回の授業だったので、月曜の授業の最初にカルタをやることにした。

結果は今のところ上々と言えそう。授業開始前、学生がどんなにぐったりしている日でもカルタが始まるとみんなしゃきつとする。また、覚えた表現や単語がよりどころになり、中国語に対する恐怖感が希薄になっているのは確かである。

何しろ反射的に取らなければならないので、考えずに反応できるようになり、すぐ役に立つ。バイト先などで中国人に使って通じ、とてもうれしかった、と語る学生もいる。

もちろんカルタだけですべての問題ががうまく行くわけでもなく、この他にも幾つかの工夫はあるのだが、中で

どれかと言えば、やはりカルタの効果は抜群と認めざるを得ない。

問題も出てきた。だんだん新出単語が多くなり、金曜の授業でもカルタをやらないと追いつかなくなりそうなことだ。机と防音の問題をどこまでクリアできるかがポイントになるだろう。

—終わりに—

たかが授業でカルタをやることにこんな大仰な文章があるのだろうか、との意見もあるだろう。しかし、一面、こんな僅かな工夫でこんな思わぬ効果が出るのなら、もっともっとその種の工夫をすべきだ、ともいえよう。私はどうも機械音痴だが、誰かこのカルタをパソコンに応用して、音声を頼りに画面で一人でカルタを取りながら、単語や短い会話表現をマスターできる、といった遊びながら学べるソフトを開発してくれないものだろうか。協力してくださる方があれば一報していただきたい。

(みつま まさみち

本学全カリ運営センター非常勤講師)